

「盲ろう者」として自分らしく生きる ～私にとって障害・仕事・支援とは～

中 條 與 子 (Nakajoh Yohko)

第4回

私の日常③ 私が好きな音楽 1

きこえた音楽の通りに口ずさんでいた

私は聞こえにくくて、見えにくい「盲ろう者」だ。「盲ろう者」であることは、私のとても大きな部分を占めているが、すべてではない。「盲ろう者」だからできないこと、「盲ろう者」だからこそできることがあると同時に、自分だからできること、自分だからできないことがあることを感じている。そして、もちろんひとりの人間として、「やりたいこと」や「やりたくないこと」があり、それらがぐちゃぐちゃになったものと、日々向き合っているのが私の毎日である。つまり、「盲ろう者」として自分らしく生きるということを、もがきながら模索しながら毎日を生きている。そのような等身大の私を、このマガジンの連載を通して、読者のみなさんにぶつけてみたい。

はじめに

3歳のとき感音性難聴と診断されて、幼稚園から補聴器を装着し、正しく日本語五十音を発音できたのが小学校4年生の時、というきこえの私はどのように音楽と触れていたのだろうか。今回の「私の日常」シリーズでは、生まれてきてから大学の頃までの時期を書いてみたい。

音楽と私

ものごころついたころ、私は童謡が好きだった。「サっちゃん」「夕焼け小焼け」「かもめの水兵さん」「七つの子」「ずいずいずっころばし」など、歌が録音されているカセットテープを聴きなが、家や外では親と歩きながら口ずさんでいた。母方祖母の家に泊まりに行くと、私が寝るときに童謡を聴くことができよう、枕元にテープレコーダを用意してくれていた。また、私自身が一人で歌ったり、喋った声を録音されたテープを聴くことも好きだった。

■幼稚園のころ

キリスト系幼稚園だったけれど記憶があるのは讚美歌ではなく、先生が弾くオルガンだった。挨拶のような歌、童謡などを、先生の演奏に合わせて歌う時間がたくさんあった。クラスがあがる毎に、音楽の時間は少なくなったが、歌うことが楽しかった。

習い事は、大人数で一緒に習うエレクトーン教室に通った。発表会で「南の島のハメハメハ大王」を、みんなで歌って弾いたことと、とても楽しかった記憶がある。

TV番組から覚える曲もあった。子門真人「およげ!たいやきくん」、ザ・ドリフターズ「いい湯だな」、アニメの「パーマン」や「ドラえもん」などの主題歌も歌った。

「トゥモロー(Tomorrow)」という歌を覚えたのも、この頃だ。同じ幼稚園の親子3組で見た、ミュージカル映画「アニー」(1982)の主題歌だ。主題歌が吹き込まれたレコードを買ってもらって、それをカセットテープに録音しられたものを何度も聴いた。大人になって、懐かしく歌詞をネットで見ると、間違えた歌詞で歌っていたことに気づいた。

■小学生のころ

校歌や、入学式、卒業式などの行事で色々な歌を合唱することや、高学年になると学年みんなで歌劇をすることも好きだった。

また、行事で楽器を演奏する機会の時は、私は木琴を演奏するパートにすすんで手を挙げた。鉄琴ではなく木琴のパートを選んだのは、いま思うと、高音域が苦手な感音性難聴ため、低めの音域が私の可聴範囲におさまるからだと思う。特に「コンドルが飛んでいく」という曲を、笛、鉄琴、私の木琴などの楽器で合奏する響きが好きで、家にあるピアノで再現して弾いて楽しんだ。

習い事は個人レッスンでピアノを習ったが、

授業の最後の10分は、先生にお願いをして自分の好きな歌の楽譜を持っていき、先生に伴奏をしてもらって歌った。ピアノに関しては厳しく指導する先生だったが、歌については伴奏に徹している様子だった。

夏になると地元の祭りで、盆踊りの音頭が会場に流れる。私は踊りも好きだったが、音頭の歌詞がとても好きで家でもよく歌っていた。それを聞いた父が、笑って「歌詞が違う」と正しい歌詞を何度も言われたが、私は「これでいいの!」と言って、正しい歌詞で歌おうとしなかった。父の反応から、私は間違えた歌詞を歌っていることは理解していたが、聴こえた通りに歌うのが私にとっての音頭であり、父のいう歌詞では音頭ではなかったのだと思う。そんな私が描いた将来の夢は、NHKのこどもの歌番組で歌うお姉さんだった。

■中学生～高校生のころ

小学校と同じく、中学、高校の校歌を歌う機会や、合唱をする文化祭が好きだった。

音楽の授業では、クラシック音楽のことを習うようになった。ヴィヴァルディの「四季」、ベートーヴェンの「運命」等、有名曲の音源を大きなスピーカから聴いたが、メロディはなんとなく覚えられても、カタカナの作曲者名、曲名を覚えるのが難しかった。何よりクラシック音楽の良さがわからず、興味を持つことができなかった。

高校の時に、初めて私の音程がずれていると指摘される機会があった。音楽のテストで、先生が演奏するグランドピアノの前で「朧月夜」を独唱した。ちゃんと歌詞の通りに歌うことはしていたが、音程が違うと言われた。私が音程を外す部分を、先生は右手だけでピアノを演奏してくれて、何度も聴いて、何度も歌い直したが、練習の甲斐もなく正しい音程で歌うことはできなかった。評価は低い点数だった。別のテストの機会に「荒城の月」を歌ったが、同じく

音程を外していると言われた。テストを通して自分自身は正しく歌っているつもりでも、正しく歌えていないと気づいた。しかし、正しく歌う方法は、当時も今もわからない。

TVのCMで記憶に残る音楽がある。女性ピアニストがカレーを宣伝するのだが、その時にグランドアノで演奏された音楽が、全体的にはきれいな音の流れなのに、最後のクライマックスの演奏時には、和音ではなく濁音に聴こえることに納得がいかなかった。CMのたびに、どうして濁音なんだろうと思った。余談だが、そのことを忘れた30代の時、友人から2005年ショパン国際コンクール優勝時のラファウ・ブレハッチのYouTube動画を聴くことをすすめられた。聴くと「英雄ボロネーズ」ともいわれる、ショパンのボロネーズ第6番変イ長調作品53番の演奏で、あの「カレーのCM」と同じ曲だった。CMでは濁音にしか聞こえなかった部分を意識してブレハッチの演奏を聴くと、音に力強い芯を感じながらも、きれいに音が重なって聴こえるのだ。そう感じるのは、音源や演奏の仕方、ピアノの響き、補聴器の違いなどあると思うが、「英雄ボロネーズ」が好きになった。

高校の頃からカラオケが流行り出して、時々、友人や親と行った。

■大学生のころ

キリスト系大学だったので、入学式はチャペルで讃美歌を歌うことから始まった。一週間に一回、礼拝の日があった。パルプオルガンの響きが好きで、必修科目の学年が過ぎても、四年間通える時は通った。よく歌う讃美歌「いくつしみ深き」、クリスマス礼拝の時に歌う「ハレルヤ・コーラス」、また前奏か後奏に選ばれた「主よ人の望みの喜びよ」のメロディを、くちずさむくらい覚えた。

児童文学科なので、時々子どもの時に好きだったものが話題になり、童謡や「NHKみんなのうた」が好きだったというと、私もと返って

きた童謡や「NHKみんなのうた」の曲名が、永遠に出てくるのではないかと思うくらい、たくさんの種類を答えた同じ学科の人がいて驚いた。私自身の好きな歌は、たくさんある童謡や「NHKみんなのうた」の歌のうちの、ほんの少しであることを感じた。

高校まで当たり前のように歌った校歌のようなもの、大学の学園歌を知る機会は2回生の終わり、オーストラリア語学研修の直前に訪れた。引率の先生から「あちらで学園歌を合唱しましょう」と提案があり、「練習する時間ないから、聴いて覚えてね」とテープを渡された。家に帰って、録音を聴くと、大学合唱部の歌声が録音されていた。覚えやすいメロディだったので、歌詞さえ見れば歌えた。現地ではペンギンを見に行く貸切バスでの移動中に、みんなで何回も練習した。ファームステイの家族、語学学校、ホームステイが終わる時のパーティの時、研修参加した学生みんなと合唱した。初めて歌詞を意識して、うたの世界に引き込まれた。学園歌なので学園創立者が夢みたことに少し触れて始まるが、それ以降は、私の気持ちを歌っているような気になった。お世話になった先生、家族、友人とのとの過ごした時間を振り返るような、いまこの時間をかみしめるような音楽。学園歌なのに、節目に立ち止まらせてくれるような、歌の力を感じた。

卒業論文では阪田寛夫の方言を扱う児童詩をテーマに選んだが、阪田は童謡「サっちゃん」を作詞したり、「NHKみんなのうた」等で発表されるなど、多くの子どもの歌を作詞していることがわかった。また、語学研修の時のお別れ場面で歌った学園歌は、「サっちゃん」を作詞作曲したコンビ、阪田寛夫と大中恵だということを知る。

卒業式のチャペルでは、讃美歌と学園歌を歌った。入学式ではこれから始まる生活の前奏でしかなかったが、歌うことで、卒業という節目をかみしめることができた。